

# シンポジウム報告 育樹から 木のある暮らし

## つないでく

編集部

「2017『国民参加の森林づくり』シンポジウム」育樹から 木のある暮らし つないでく」を10月21日、東京都江東区新木場の木材会館で開いた。木材の流通拠点である新木場を舞台にした、第42回全国育樹祭の開催1年前プレイベントだ。基調講演では編集者・評論家の山田五郎さんが、「木々は異文化をつなぐ接点になっている」と、独自の切り口で話した。パネルディスカッションでは、サステナブルな（持続可能な）未来のために、木を使うことの大切さが再認識された。

（主催・東京都、国土緑化推進機構、朝日新聞社、森林文化協会）

### 基調講演 『木の文化』でつながる世界

編集者・評論家 山田五郎さん

父の実家が静岡の突板商で、銘木に親しみながら育ったせいも、趣味のギターを選ぶにも、木材の産地や種類が気になります。アメリカで訪れたギター屋さんでも、「日本人はなぜいのちばんに木の種類を聞くんだ」と不思議がられました。



よく日本は木の文化で、西洋は石の文化だと言われます。しかし歴史をひもといてみると、西洋にも木の文化が根強く息づいていることが分かります。ゲルマンのご神木信仰がキリスト教化したクリ

### 西洋にも息づく木の文化 木々は異文化をつなぐ接点

スマスツリー、新郎新婦がノコで木を切る結婚式、経度測定に貢献した木製歯車の時計……、ヨーロッパに残る木の文化の例を挙げていけばきりがありません。森林や木々は自然。自然は洋の東西を問わず同じもの。木々はそれぞれの地域に固有の文化を育てると同時に、異文化をつなぐ接点としての役割も果たしてくれているのではないのでしょうか。これからは森林に触れるのはもちろん、木で作った製品をもっと暮らしの中に取り入れて、木の文化を小さい頃から学んでほしい。そのことで日本が誇る木の文化を世界に発信し、異文化をつなげていく核となればいいなと願っています。

### パネルディスカッション

- コーディネーター 宮林茂幸
- 東京農業大学教授 パネリスト 田中惣一
- 田中林業(株)代表取締役 田中惣一
- (株)古川ちいきの総合研究所代表取締役 古川大輔
- 東京おもちゃ美術館副館長 石井今日子
- (敬称略)

宮林 まずパネリストの皆さんに、今取り組んでいるお仕事の内容をご紹介いただきたい。田中 江戸時代の初期から続く本業の林業に加え、炭や薪、シイタケの原木の販売、弊社の木で造ったコテージの経営をしている。2012年に法人化をした。責任ある管理をしている森林に対して与えられるFSC森林認証を早い段階で取得した。他のFSC取得先と組んで、様々な共同イベントを実施し、業界全体の繁栄を目指している。

古川 トータル林業、フリースタイル林業をテーマに、様々な地域の関係者のコンサルティング、木材のブランド化のプロデュースに取り組んでいる。林業はマテリアル（素材）業で終わってしまったことが多い。素材がプロダクトになり、そこからマネタリーとしての消費

財になって、さらにそこに空間ができることによるライフスタイルの提案までということ

を、複数の会社がチームとなって実現していくお手伝いをしていく。

石井 今日木を使う消費者の立場の代表として臨んだ。廃校になった東京・四谷の小学校を活用して、東京おもちゃ美術館の設立に携わり、現在は副館長を務めている。美術館には多摩認証材で造った「赤ちゃん木育ひろば」がある。年間15万人のお客様が訪れてくれるわけは、木の持つ温かさ、手触りやにおいにあると思う。木と接することによって、子どもの表情が明るくなった、活発で積極的になったというお母さんの声が多い。また子どもだけでなく、親御さんの気持ちも同じように変化したという。

宮林 今日のテーマにも関わるが、木をもっと生活の様々な場面に取り入れていくためには、どのようなことが必要だろうか。



田中 森林環境教育を、学校の授業の中にもっと取り入れていくべきだ。しかも座学に終わらずに子どもたちを実際に森へ連れて行って、気付いたことを皆で共有することが重要だ。森が良いものだ、大切なものだというイメージを持って育った子どもは、大人になっても森に対してのプラス思考が強く、必然的に木を使うことにも積極的になると思う。

宮林 学校教育の他、家庭教育、地域教育、

## 「東京発 木のある暮らしとサステナブルな未来」

### 子どもたちを実際に森へ／ライフスタイルの提案まで



企業教育にももっと取り入れていくべきだ。古川 林業や製材業を本業としている方たちの中には、自信や誇りを感じている方が、実際には少ない。自信と誇りを持つためには、マーケットとビジョンを明確に持つことが必要だ。ではマーケットやビジョンをどうやって作っていくかというところ、それは実は山を持つている方、製材を営む経営者の方たちの手腕によるところが大きい。実際にやっている経営者のマインドとか経営力

を上げていくことに、側面からの支援が必要だと思っている。石井 西新宿の東京都庁にあるとちよう保育園は、多摩材がふんだんに使われていて、木質化されている。都庁の森林課では、ハード面とソフト面の両方に助成金を出す木育推進事業を展開している。このような施策というのをもっと有効活用して、木造りの保育施設が広がっていくといいなと思う。

宮林 来年の全国育樹祭、2020年のオリンピック・パラリンピックを控え、東京から発信する「木のある暮らしとサステナブルな未来」の実現に向けて、皆さんそれぞれの立場から一言ずつ。



石井 東京を訪れる一人でも多くの方に對し、木の素晴らしさを伝えていきたい。ただそれは単に木の良

### 木材利用のイニシアチブを／ドラマとして木を語ろう



あるいは世界に向けて木材利用（木の文化）のイニシアチブを取る。そのためには東京都が中心になりながら、もつと木を使うことや木材の機能性などについて議論の場を持つべきだ。しかもそれが具体的な中身に踏み込み、異業種の方たちとも組んだものでできれば、また違った方向性や新しい芽も出てくるのではないか。今日のシンポジウムもその一つのヒントになればと思う。

田中 オリピック・パラリンピックは、東京の製材店、工務店、家具職人等の森に関わるメンバーが一致協力してできることを考える良い機会にするべきだと考える。宮林 東京は2020年を迎える中で、全国、